

とするには、鶏の腹を水にひたし冷せば、其事止むもの也。まは腹の熱をさとぞはめなんは水に投るゝ事なり、はめははませにて、すてもの、中へこなたより入る事を、いふ詞にて、今水中へ物を投るゝをもはめはむるなど云是也。女此鶏の又宵鳴せん事をにくみきらひて、玄かせんといへる也。ぐだかけのくだは腐にて、鶏をふかく惡みての、しりたる言也。此歌をおきて、鶏へること、一首の意は、夜あけなば、きつにうちはめなん腐鶏よ、汝が宵鳴せしゆゑに、曉ぞとおもひて夫をかへしやりつるが、くやしく悲しき事、かさねてしか、宵鳴はせさせじといへる也。といひおこせき、いとめづらしき説にぞありける。

〔三國傳記十〕依一首歌盲鶏眼開事

和云、中比伊豆ノ三島ノ大明神之社頭ニ、鶏多ク有リケル中ニ、盲雞一隻アリ、自餘ノ鳥共ハ虫類ヲ啄ミ、全口米ヲ拾ヒテ、モハノ中ニ肉飽テ、肥滿シテ聯翩セリ。此ノ盲鳥ハイツモ暗夜ノ如クナレバ、時ナラヌ時ヲ作り、食ナラヌ食ヲ嗜、或ハ爲童子打擲セラレ、或ハ爲猫犬驚キ鳴ク、無知南北偏往還、不辨朝夕苦風霜、爰ニ修行者ノ有ケルガ、此盲鳥ノ疲瘦飢渴セルヲ見テ、物ヲ哀マバ是ニ過タル事有ベカラズ、穴カハユヤトテ硯ヲ乞ヒテ、其鳥ノ頸ニ短冊ヲ付タリケレバ、鳥眼忽ニ開ヒテ物ヲ見ル事自在ナリ、社人等恠ミテ是ヲ見レバ、一首ノ歌ニテゾ有リケル。

鶏ノ鳴ク音ヲ神ノ聞キナガラ心ヅヨクモ目ヲ見セヌ哉、此ノ歌神感ニ達シケル故也。靈神ノ感應歌道ニアル事ハ不珍イヘドモ、纔ニ三十一字ヲモテ神慮ニ達スル事、誠ニ新タナル奇特也。〔日本書紀天武十九〕四年四月庚寅、詔諸國曰、莫食牛馬犬猿鶏之完以外不在禁例、若有犯者罪之、〔和漢三才圖會原禽〕鶏○中

按、雞家畜之馴於庭、能鳴告時、而丑時始鳴者稱一番鳥、寅時鳴者稱二番鳥、人賞之、丑以前鳴者爲不祥、俗謂之宵鳴。